

中央アナトリア、アッシリア・コロニー時代における 青銅製品について

常木 麻衣

A Study of Bronze Artefacts from Central Anatolia during the Assyrian Colony Period

Mai TSUNEKI

アナトリアの所謂「アッシリア・コロニー時代」(前1950年頃～前1719年頃)は、中央アナトリアの都市カニシュ(現キュルテペ)と北メソポタミアの都市アッシュールとの間で、交易が盛んに行われていた時代である。この時代の交易品としてあげられるのは銅と錫である。銅はアナトリア内での交易の主要品目として、また青銅をつくるのに欠かせない錫は遠隔地交易の主要品目として知られている。そこで本稿では、青銅を造るための原料である銅と錫の供給について言及し、さらに中央アナトリアで出土した青銅製品を用途ごとに分類し、それらの出土地点を詳細に検討した上で、出土地点による青銅製品の当時の使用状況について考察した。

キーワード：中央アナトリア、アッシリア・コロニー時代、青銅製品、銅、錫

It is well known that the trade between Aššur and Kaneš (Kültepe) was actively carried out by people of Aššur during ca. 1930 BC to ca. 1750 BC. This period is known as the so-called “Assyrian Colony period” in Anatolian historical terms. Besides textiles, one of the most important trade goods was tin necessary for making bronze, an alloy of copper and tin. Textiles from Babylonia and tin brought from elsewhere were re-exported from Aššur to Kaneš, a historical fact supported by textural evidence from Kültepe-Kaneš. Although copper was a natural product in Anatolia, there is no textural evidence that copper was exported from Anatolia to Aššur; but it is texturally known that copper was traded internally within Anatolia.

Focusing on this trade, this study aims at examining bronze objects from sites in central Anatolia, where people from Aššur resided and were engaged in trade. The examination itself will be made through a functional and typological classification proposed by the writer. The provenance of bronze objects confirmed through excavations suggests that in many cases, they were of practical use as well as in widespread and common use rather than specific objects made for ritual and burial. This is a period called the Middle Bronze Age in archaeological terms. Still problematical is the source of tin concerned with this trade and, this should be discussed prior to the examination of central Anatolian bronze objects dating to this period. Naturally, sources of copper in Anatolia are of a matter which should be clearly explained in addition to the tin problem.

Key-words: Central Anatolia, the Assyrian Colony Period, Bronze artefacts, copper, tin

1. はじめに

アナトリアの歴史考古学でいうところの「アッシリア・コロニー時代」(前1950年頃～前1719年頃)(Kulakoğlu 2011: 1019)¹⁾、中央アナトリアでは、キュルテペ(Kültepe)／古代名カニシュ(Kanesh)を拠点とし、北メソポタミアの都市国家アッシュール(Aššur)との交易が盛んに行われていた(図1)。その交易は、アッシュールから青銅の原料となる錫や織物などを輸入し、銀あるいは金で支払いを行うというものであった。金、銀などの金属鉱物資

源を有するアナトリアで、当時、それらの採掘が行われていたことは確かである(Yener et al. 1996: 375)。また、当時のアナトリアには銅を豊富に産出する鉱山が存在したことも確認されており(Dercksen 1996: 27-28)、原産の銅に錫を加え铸造した青銅製品が使用されていたことも、発掘調査において確認されている。

青銅²⁾とは、銅と錫の合金であり、銅やヒ素銅よりも強度が強く、耐蝕性がある。錫の割合が高いものほど青銅の硬度が増すが、錫の量が増すごとに、強度が脆くなる。

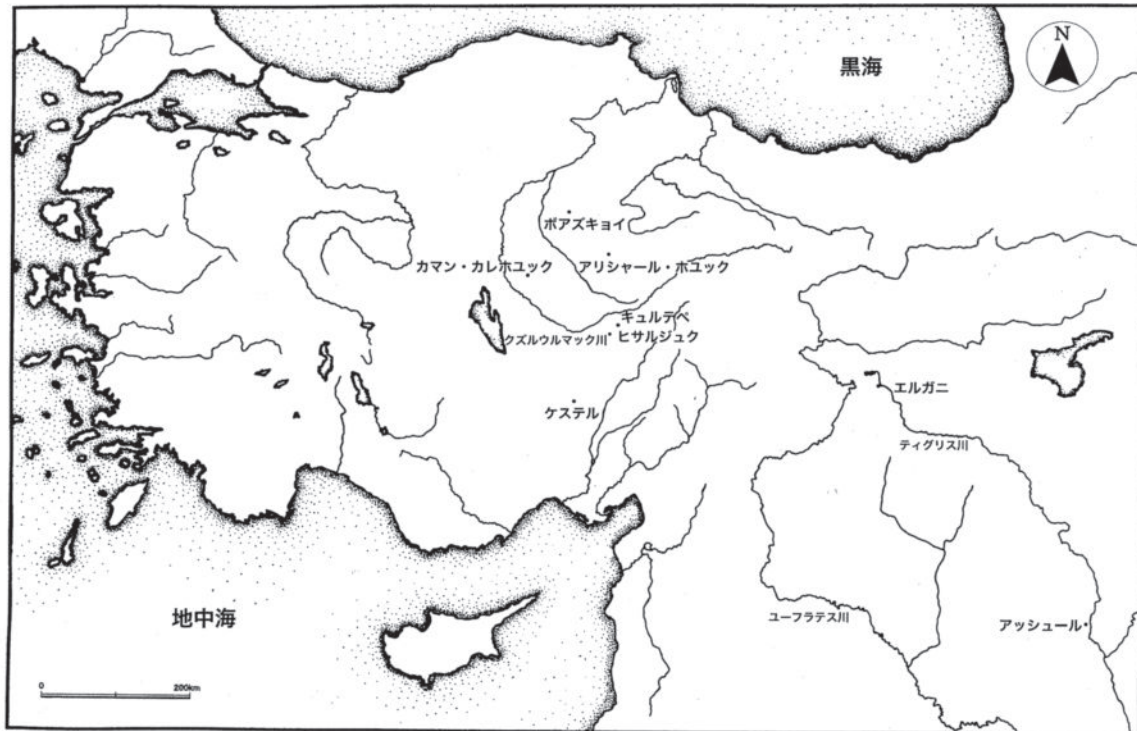


図1 本稿で言及する遺跡・地名 (大村 1999: 5、図版1より改変)

最高強度で、脆くない青銅の銅と錫の配分率は、銅 90% に対し、錫 10% であるとされている。また、青銅には適度な展延性と流動性があり、銅に比べて融点が低いことから鑄造に適した合金であるため、銅から青銅へと移行していったのは必然であったといえるだろう。

青銅製品の器種としては、武器などに使用されていたと考えられる、短剣、槍先、斧、鎌、二又の武器、また道具として使用されていたと考えられる、ナイフ、鎌、錘、鑿、ボウル、カップ、ゴブレット、フライパン、バケツ、リール、石突、へら、鑄型、ピンセット、装飾品として使用されていたと考えられる、ピン、針、リング、プレスレット／アンクレット、スタンプ、笏の計 25 点を今回比較資料として用いたが、当時使用されていた青銅製品としては他にも、ハンマーアックス、容器、胸当てベルトの締め金なども出土が確認されている。

本稿では、まず、青銅製品の鑄造に欠かせない、原料である銅と錫の供給について考察する。そして、青銅製品の出土地点を主丘の建物跡、カールム区域の建物跡、カールム区域の墓の 3 つに分け、「アッシリア・コロニー時代」の青銅製品の使用状況について考察を行う。

2. 青銅製品の原料供給と工房跡について

1) 銅の供給源と交易

アナトリアには多くの鉱物資源が存在するが、その中でも、特に銅の供給源はアナトリア内にあった可能性が指摘されている (Dercksen 1996: 27-28; Lehner 2014: 139, Fig. 1; Wilkinson 2014: 157, Fig. 5.1) が、キュルテペ出土の文書内にはそれらの記述は確認されていない (Larsen 1976: 91)。また、青銅の主成分である銅は、北メソポタミアでは豊富ではなかったため、アッシュールで必要とされていたと考えられるが、アッシリア商人は、対アナトリアとの交易を通してではなく、アナトリアの産地から直接アッシュールに持ち込まれるかたちで銅の供給を得ていたと考えられている (Larsen 1976: 91-92)。実際、ユーフラテス川上流域のエルガニ (Ergani) 周辺 (図1) では、有名な銅の鉱床が存在していることから (Wilkinson 2014: 157, Fig. 5.1)、これらの銅の産地から直接輸入したという可能性は大きいと思われる (Larsen 1976: 92)。さらに、銅の売買は、主にアナトリアの商人によって行われていたため、キュルテペとアッシュールを結ぶ、長距離交易の一部には組み込まれていなかったようである (Dercksen 1996: 164)。

2) 錫の供給源と交易

アッシリア商人の主な交易品の一つである錫はアナトリアにおいても、メソポタミアにおいても貴重な鉱山資源であった。錫の鉱山は、アフガニスタン方面にあると考えられており (Dercksen 2004: 30)、東方からもたらされた錫は、古バビロニアを經由して北メソポタミアのアッシュールに至り、対アナトリア交易の主要品目とされた (Barjamovic 2011: 9; Dercksen 2004: 26)。また、アフガニスタンからアッシュールへ錫を運んだのは、アッシリア商人ではなく、他の地域の商人によって運ばれたとされている (Barjamovic 2011: 9; Veenhof 1995: 863)。

アナトリアの錫の鉱脈の問題に関しては、近年、タウルス山脈 (Wilkinson 2014: 161, Fig. 5.4) のケステル (Kestel) (図1) でその鉱脈が発見されており、また、中央アナトリアでも錫が採掘されていた³⁾ という見解が主流になりつつある (Lehner 2014: 139, Fig. 1)。しかし、この時代に錫の採掘がアナトリア全域で行われていたかどうかは不明であり、また、キュルテベ出土文書⁴⁾ から知られるように、対アッシュール交易の主要品目が錫であったことは疑う余地のない事実であるため、青銅をつくるために必要な錫の供給については、アナトリアの多くの都市や町がこの対アッシュール交易に依存していたと考えるのが現時点では妥当であると考えられる (Postgate 1992: 212)。

3. 青銅製品の分類

青銅などの金属の場合、再鑄造が可能なため再利用されることから年代の決定が難しいといった問題が存在する上に、土器などの遺物と比べると圧倒的に出土数が少ない。しかし、アナトリアでは、他の地域に比べ比較的青銅製品の出土遺物が豊富であるため、青銅製品の研究を行う上で基準となる資料となり得ると考えられる。そのため、本稿の分類では、中央アナトリアの遺跡から出土した資料をもとに、特にそれぞれの形状に変化が見られた、短剣、槍先、斧、ピンの4つについて分類を行った。その他の青銅製品は、用途別に分けた場合、それぞれの形状が似通っているため、詳細なタイプ分けを行わず、本稿では一括して扱っている。

1) 短剣

刀身が短く、先端にいくにつれ尖り、両刃のものが短剣である。柄の部分は、通常、木製もしくは革製でできているため残存することは稀である。刀身の持ち手側 (柄との接続部分) には、基本的には2つ以上の鋳穴が付属し、一部、鋳の残存が確認できる。

① 短剣タイプ 1a (図2:1)

平刃で断面が菱形もしくは台形で、1~2本の稜線がある。2つの鋳が横に並んでいる。刃の両端は、先端に向かうにつれ少し湾曲している。このタイプは、レバントの墓からも出土が確認されている (Gernez 2007: Pl. 590. 1, 2, 12)。

② 短剣タイプ 1b (図2:2)

短剣タイプ 1a と形状に類似がみられるが、このタイプは、刀身の持ち手側が、台形型をしており、さらに、鋳が3つ三角形の配置で付属している。キプロスやレバントの墓からも出土が確認されている (Gernez 2007: Pls. 599. 3, 602. 1, 4, 8, 10)。

③ 短剣タイプ 1c (図2:3)

細長い両刃で、菱形の断面図をもち、3つ以上の鋳が横一列に並んでいる。周辺地域では、南レバントやキプロスでも同様のタイプの出土が確認されている (Gernez 2007: Pl. 605. 8, 9)。

④ 短剣タイプ 2 (図2:4)

細長い両刃とそれに付属する形で、刀身の持ち手側には縦一列に鋳穴が存在する。このタイプは、エジプト (Philip 2006: 47-48, Fig. 15.1, 2) やメソポタミア (Gernez 2007: Pl. 560. 3, 4) から出土が確認されている。

⑤ 短剣タイプ 3 (図2:5)

細長い両刃を持つが、鋳穴がなく、刃の部分に柄を直接くりつけて使用したと考えられる。アリシャル・ホックからのみ出土が確認されているタイプで、ワバルトゥムの建物跡から2点 (Schmidt 1932: 155, Fig. 194. b2072)、そして副葬品として墓から1点の出土が確認されている (Schmidt 1932: 155, 182, Fig. 194. b2651)。

2) 槍先

槍先とは、尖った刀身とそれに付属する柄との接続部分で構成されている。投げたり、突き刺したりして、武器として使用されたものである。本稿の槍先の中でも、柄との接続部分がソケット状のタイプは、前2千年紀初頭の中央アナトリアでは一般的なものであったと考えられる。

① 槍先タイプ 1a (図2:6)

刃の形状が平らな両刃で、菱形の断面をもつタイプである。柄との接続部分は、ソケット状になっている。刃に対して垂直に1本の鋳で柄を止めるようになっている。形状から、鑄型で作られたと考えられる。このタイ

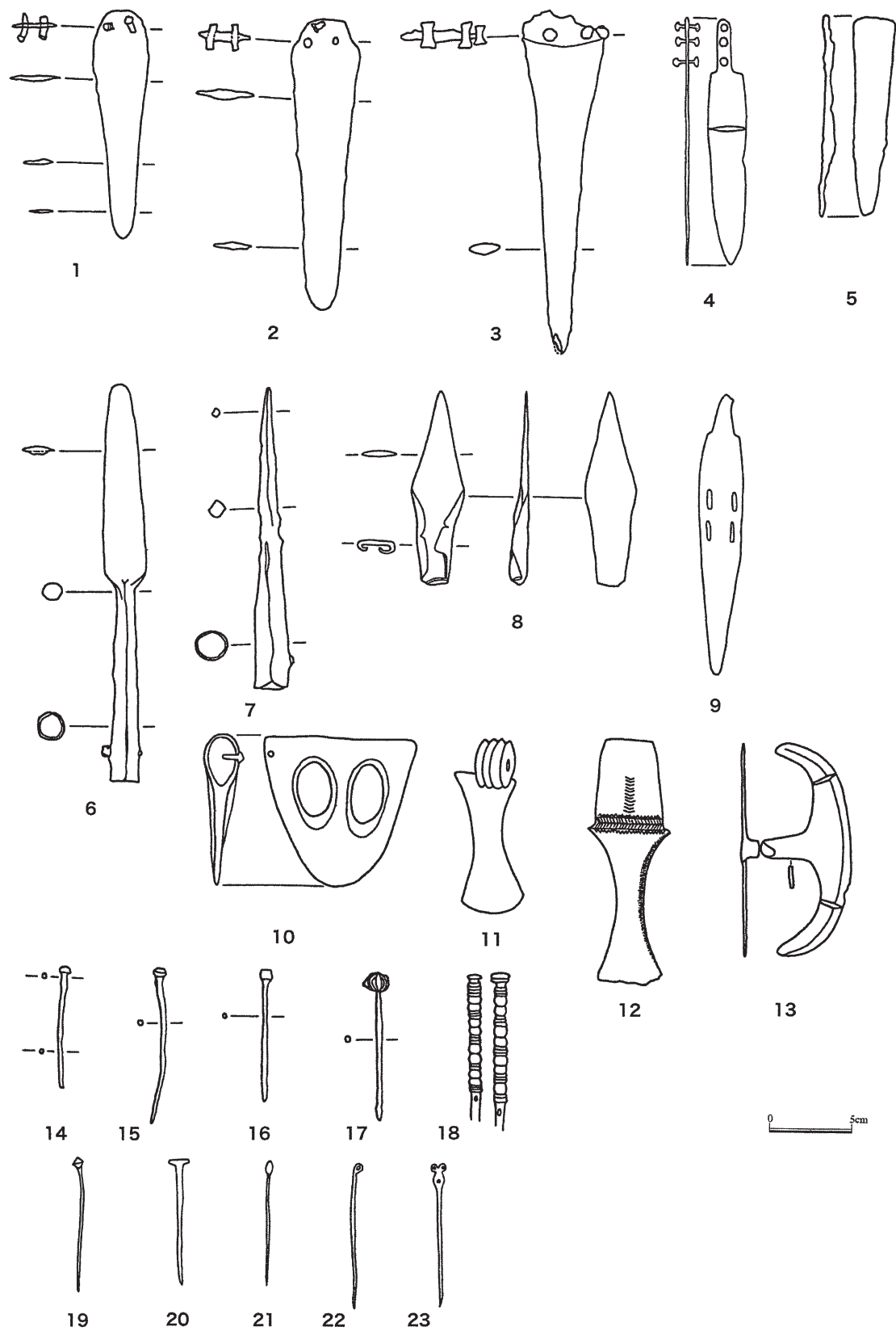


図2 中央アナトリア出土の青銅製の短剣、槍先、斧、ピン (1-5: 短剣、6-9: 槍先、10-13: 斧、14-23: ピン)
(Tsuneki 2014: 217-219, Figs. 1-3, 221, Fig. 5 より改変)

ブは、アラビア半島南東部、レバント、メソポタミア (Gernez 2007: Pls. 417. 1, 431. 2-3, 433. 2-3, 434. 6)、エジプト (Philip 2006: 59-60, Fig. 23) から出土が確認されていることから広範囲にわたり同様のタイプが使用されていたと考えられる。

② 槍先タイプ 1b (図 2: 7)

刃の部分の断面は、丸型もしくは菱形の形をしている。タイプ 1a と同様にソケット状で、1本の鋌が刃に対して垂直に止まっている。このタイプも、鋳型で鋳造されたと考えられる。同様のタイプが、前 2 千年紀初頭の北部及び南東アナトリアでも確認されているが、出土状況が不明瞭であるため、比較するのは困難である (Gernez 2007: Pls. 289-290)。

③ 槍先タイプ 2 (図 2: 8)

平らな両刃に、柄との接続部分は、両端から中央にかけて巻きつく形である。このタイプは、タイプ 1 のソケット状の槍先が鋳造される前段階のものであると考えられる。アナトリアの他に、レバントからも出土が確認されている (Gernez 2007: Pl. 418. 1)。

④ 槍先タイプ 3 (図 2: 9)

両刃の中央部に 2~4 つの細長くて短い穴が空いている。キュルテベのカーラム・カニシュ第 I b 層と同時期の宮殿趾から出土した有名な「アニタの槍先」がこのタイプに該当する (Özgüç 1999: 15, Fig. E. 126, Pl. 107. 1a-c)。

3) 斧

斧は、三角形もしくは長方形の形をした片刃をもち、柄との接続部分は、ソケット状もしくは平面である。基本的には木を切る道具として使用されていたが、時には、武器として使用されることもあったと考えられる。

① 斧タイプ 1 (図 2: 10)

刃の中央部に並列した二つの丸い窓をもち、柄との接続部分はソケット状のタイプである。カーラム・カニシュ第 II 層の墓 (Özgüç 1986: Pl. 90. 2) から出土しており、シリア方面から輸入されたものであったと考えられている (Özgüç 1959: 109)。周辺地域では、レバント、エジプト、ユーフラテス川流域でも多数出土が確認されている (Gernez 2007: Pls. 134. 5, 142. 5, 143. 4, 144. 7, 149. 2)。

② 斧タイプ 2a (図 2: 11)

刃の形状は、中央部の両端にくびれのある長方形で丸

みを帯びた片刃であり、柄との接続部分はソケット状のタイプである。このタイプは、メソポタミアの墓からも出土が確認されている (Gernez 2007: Pls. 105. 2, 106. 3)。

③ 斧タイプ 2b (図 2: 12)

刀身と柄との接続部分が一枚の青銅板で造られている。刃の形状はタイプ 2a に酷似している。G. フィリップ (Philip) によれば、このタイプは「平らな斧 (flat axe)」と呼ばれている (Philip 2006: 31-33)。西アナトリア (Deshayes 1960: 500) や南アナトリア (Deshayes 1960: 564) 方面からの出土も確認できることから、アナトリアの広範囲にわたって使用されていた形状であると考えられる。

④ 斧タイプ 3 (図 2: 13)

三日月型の形状をした片刃と、刀身の凹状の中央部に柄との接続部分が存在する。このタイプの多くは、エジプト (Gernez 2007: Pl. 130. 5-6) やレバント (Philip 1989: 280-281) の前 2200 年頃~前 1800 年頃の層からの出土が確認されている。

4) ピン

ピン⁵⁾とは、細長い胴部と尖った先端を持ち、頭部に球形または正方形などの形をしたものが付属している。布を留める役割や、時には、髪留めとして利用されたと考えられる。本稿では、ピンを 10 種類のサブタイプに分類した。

① ピンタイプ 1 (図 2: 14)

半円状の頭部をもつタイプである。ボアズキョイの報告書に記載されているピンの区分でいうと、主丘 IV d 層のタイプ e に相当する (Boehmer 1972: Abb. 33)。このタイプは、レバントからの出土 (Klein 1992: 98-99, Taf. 14) も確認されている。

② ピンタイプ 2 (図 2: 15)

球体状の頭部をもつタイプである。ボアズキョイの区分では、主丘 IV d 層のタイプ a もしくはタイプ d に相当する (Boehmer 1972: Abb. 33)。また、H. クライン (Klein 1992: 80) によれば、このタイプは前期青銅器時代の層からよく出土するタイプであると考えられている。

③ ピンタイプ 3 (図 2: 16)

正方形もしくは、多角形の頭部をもつタイプである。ボアズキョイ主丘 IV d 層のタイプ 1 に相当する (Boehmer 1972: Abb. 33)。レバントから同様のタイプの出土が

確認されている (Klein 1992: 170)。

④ ピンタイプ4 (図2: 17)

球体の頭部が6~9つのヒダ状に分割されたタイプである。ボアズキョイ主丘IV d層のタイプkに相当する (Boehmer 1972: Abb. 33)。このタイプは、イラク方面からの出土も確認されている (Klein 1992: 119)。

⑤ ピンタイプ5 (図2: 18)

「トグルピン (toggle pin)」と呼ばれる、装飾されたピンである。頭部の装飾が幾重にも施されており、さらに頭部の飾りの下に小さな穴が開けられているものもある。カールム・カニシュ第I b層の墓から10点の出土が確認されている (Özgüç 1986: Pl. 125. 1-7, 10, 11, 16)。この「トグルピン」は、カールム・カニシュでは代表的なピンのタイプであり、北シリアやレバント方面から同様のタイプの出土が確認されている (Özgüç 1986: 32-33, 72)。その他にも、エジプトから同タイプの出土が確認されているが、青銅製ではなく銅製であることがわかっている (Philip 2006: 95-99, 96-97, Figs. 45-46)。

⑥ ピンタイプ6 (図2: 19)

頭部が円錐の形をしたタイプである。ボアズキョイ主丘IV d層から出土したタイプbもしくはタイプnに相当する (Boehmer 1972: Abb. 33)。同様のタイプは、アッシュールからの出土が確認されている (Klein 1992: 104)。

⑦ ピンタイプ7 (図2: 20)

頭部が平らな形をしたタイプである。ボアズキョイ主丘IV d層のタイプfに相当する (Boehmer 1972: Abb. 33)。このタイプは、カールム・カニシュ第I b層と同時期に相当する、アリシャル・ホユックの墓から、副葬品としての出土が確認されている (Schmidt 1932: 160, Fig. 201. b2655)。また、このタイプと類似するものが、カールム・カニシュ第II層および第I b層の住宅の側の道から出土しているが、それらは骨製品であった (Klein 1992: 167)。

⑧ ピンタイプ8 (図2: 21)

しずく型の頭部をもつタイプである。ボアズキョイ主丘IV d層のタイプqに相当する (Boehmer 1972: Abb. 33)。同様のタイプは、レバントや北シリアからの出土も確認されている (Klein 1992: 70-71)。

⑨ ピンタイプ9 (図2: 22)

コイル状の頭部をもつタイプである。ボアズキョイ主丘IV d層のタイプoに相当する (Boehmer 1972: Abb. 33)。南および南東アナトリアやシリア、イラク (Klein 1992: 122-123)、エジプト (Philip 2006: 97, 102, Fig. 46) など多方面からの出土が確認されている。

⑩ ピンタイプ10 (図2: 23)

動物などの小立像の頭部をもつタイプである。頭部の飾りの下に、小さな穴が開けられているものもある。カールム・カニシュ第I b層と同時期に相当する、アリシャル・ホユックの建物跡からの出土が確認されている (Schmidt 1932: 161, Fig. 202. b1254)。その他には、南アナトリアやレバントからの出土も確認されている (Klein 1992: 127-128)。

4. 考察

まず、本稿で言及する中央アナトリアの遺跡から出土した遺物の年代は、カールム・カニシュの第II層と第I b層を基準とする。そのため、キュルテペ出土の遺物は、第II層と第I b層の2つ層に分けることができ、それに準じて他の遺跡を考えると、アリシャル・ホユック⁶⁾、ボアズキョイ⁷⁾、およびカマン・カレホユック⁸⁾から出土した遺物は、全てカールム・カニシュの第I b層と同時期のものであると考えられる。

さらに、出土地点について見ていくと、カールム・カニシュの第II層では、カールム区域内の建物跡 (工房跡も含む) と、墓が確認されている (表1)。カールム・カニシュの第I b層および、それに相当する時期では、ボアズキョイ、キュルテペ、カマン・カレホユックの主丘で建物跡が確認されている。さらに、アリシャル・ホユック、キュルテペ、ボアズキョイでは、カールム/ワバルトゥム区域の建物跡からの出土が確認されており、特に、キュルテペでは、カールム・カニシュの第II層と同様に、工房跡も確認されている。また、アリシャル・ホユックおよび、キュルテペでは、カールム/ワバルトゥム区域の墓も確認されている (表2)。カールム・カニシュの第II層と比べて特筆すべき点としては、キュルテペ主丘の宮殿跡から遺物の出土が確認されていること、また、カマン・カレホユックから出土した多くの遺物は、火災を伴う破壊層からの出土が確認されていることである。

1) 青銅製品と出土地点の関係

① 主丘建物跡から出土した青銅製品

キュルテペ、ボアズキョイ、カマン・カレホユックのカールム・カニシュ第I b層に相当する層では、主丘

の建物跡から青銅製品の出土が確認されている。特にキュルテベの主丘から出土した遺物は、全て宮殿跡からの出土である。主な遺物は、槍先のタイプ3、ボウル、カップ、ゴブレット、笏の出土が確認されており、これらの青銅製品は、出土地点からもわかるように、キュルテベの為政者によって使用されていたことは明らかであり、儀礼や祭祀に使用された可能性も考えられる。また、ボアズキョイでは、ナイフ、鎌、鑿、ピンセット、ピンのタイプ4とタイプ7、針の出土が確認されている。カマン・カレホックの主丘から見つかった青銅製品は、激しい火災の痕跡とともに出土が確認されている(大村 1995: 30、図 18)。そこから出土したのは、短剣タイプ 1a、1b、1c、槍先のタイプ 1a と 1b の出土が確認されている。また、鎌と錐、ピンタイプ 1~4、および多数の小さなリングも出土が確認されている。そして、スタンプが破壊層で発見されたことから、この層で見つかった遺体の誰かによって、日常的に使用されていた可能性が高いと思われる。同様に、壺の中からピンセットが出土したのは、出土地点で、日常的に使用されていたのではないだろうか。カマン・カレホックの火災を伴う破壊層は、武器や日常的に使用されていた道具、個人的な装飾品などが放棄されたそのままの状態で見つかったことから、青銅製品が日常生活の中でどのように使用されていたのかがわかる特異な例であるとい

える。また、遺跡の規模から考えると、キュルテベの宮殿跡やボアズキョイの主丘とは、性格の異なるものであった可能性が高い。

② カールム／ワバルトゥムから出土した青銅製品

カールム・カニシュ第Ⅱ層のカールム区域の建物跡から出土した青銅製品は、鎌、二又の武器、鋳型の出土が確認されている。また、工房跡から鎌、鋳型の出土も確認されている。

カールム・カニシュ第Ⅰb層と同時期のカールム／ワバルトゥムの建物跡から青銅製品が出土した遺跡は、アリシャル・ホック、キュルテベ、ボアズキョイである。まず、短剣は、アリシャル・ホックから5つのタイプ全ての出土が確認されている。ボアズキョイからも、短剣タイプ 1a、タイプ 1b およびタイプ 2 の出土が確認されているのに対し、キュルテベからの短剣の出土は現在のところ確認されていない。槍先では、アリシャル・ホックでタイプ 1a、1b およびタイプ 2 の出土が確認され、ボアズキョイでは、タイプ 1b とタイプ 3 の出土が確認されている。そして、ここでもキュルテベからは、槍先の出土が未だ確認されていない。また現時点で、槍先タイプ 3 は、キュルテベの宮殿跡とボアズキョイの下の町からしか見られない特異な例であるといえる。その他の特徴としては、斧タイプ 2b と鑿は、

表 1 カールム・カニシュ第Ⅱ層から出土した青銅製品 (Tsuneki 2014: 168-169, Table 4.8 より改変)

タイプ	カールム建物跡 (工房跡)	カールム墓	タイプ	カールム建物跡 (工房跡)	カールム墓
短剣タイプ 1a	0	0	フライパン	0	1
タイプ 1b	0	0	バケツ	0	0
タイプ 1c	0	0	リール	0	0
タイプ 2	0	0	石突	0	0
タイプ 3	0	0	へら	0	0
槍先タイプ 1a	0	1	鋳型	5 (工房跡 17)	0
タイプ 1b	0	0	ピンセット	0	0
タイプ 2	0	0	タイプ 2	0	0
タイプ 3	0	0	タイプ 3	0	0
斧タイプ 1	0	2	タイプ 4	0	5
タイプ 2a	0	3	タイプ 5	0	0
タイプ 2b	0	1	タイプ 6	0	0
タイプ 3	0	0	タイプ 7	0	0
鎌	1	0	タイプ 8	0	0
二又の武器	1	0	タイプ 9	0	0
ナイフ	0	0	タイプ 10	0	0
鎌	(工房跡 1)	0	針	0	0
錐	0	0	小さいリング	0	1
鑿	0	0	プレスレット/ アंकレット	0	0
ボウル	0	0	スタンプ	0	0
カップ	0	0	笏	0	0
ゴブレット	0	0			

表2 カールム・カニシュ第I b層と同時期の層から出土した中央アナトリアの青銅製品
(Tsuneki 2014: 168-169, Table 4.8 より改変)

タイプ	主丘建物跡 (宮殿跡 / 破壊層)			カールム / ワバルトゥム建物跡 (工房跡)			カールム / ワバルトゥム墓	
	カマン・カレホ ユック	キュルテペ	ボアズキョイ	アリシャール・ ホユック	キュルテペ	ボアズキョイ	アリシャール・ ホユック	キュルテペ
短剣タイプ 1a	(破壊層 3)	0	0	3	0	3	0	0
タイプ 1b	(破壊層 3)	0	0	3	0	1	0	3
タイプ 1c	(破壊層 1)	0	0	1	0	0	0	1
タイプ 2	0	0	0	1	0	1	0	1
タイプ 3	0	0	0	2	0	0	1	0
槍先タイプ 1a	(破壊層 1)	0	0	1	0	0	0	3
タイプ 1b	(破壊層 3)	0	0	1	0	1	0	0
タイプ 2	1	0	0	2	0	0	0	0
タイプ 3	0	(宮殿跡 1)	0	0	0	1	0	0
斧タイプ 1	0	0	0	0	0	0	0	2
タイプ 2a	0	0	0	0	0	0	0	2
タイプ 2b	0	0	0	0	3	1	0	0
タイプ 3	0	0	0	0	0	0	0	1
鍬	0	0	0	1	0	2	0	1
二又の武器	0	0	0	0	0	0	0	2
ナイフ	0	0	1	1	2	5	0	0
鎌	3 (破壊層 5)	0	1	2	0	2	0	0
錐	(破壊層 4)	0	0	38	0	17	1	0
鑿	0	0	1	0	2	4	0	0
ボウル	0	(宮殿跡 1)	0	0	0	0	0	1
カップ	0	(宮殿跡 1)	0	0	0	0	0	0
ゴブレット	0	(宮殿跡 1)	0	0	0	0	0	0
フライパン	0	0	0	0	0	0	0	0
バケツ	0	0	0	0	0	0	0	1
リール	0	0	0	0	0	0	0	3
石突	0	0	0	4	0	1	0	0
へら	0	0	0	1	0	0	0	0
鋳型	0	0	0	1	7 (工房跡 9)	2	0	0
ピンセット	(破壊層 1)	0	1	0	0	0	0	0
タイプ 2	(破壊層 6)	0	0	9	0	5	0	0
タイプ 3	(破壊層 2)	0	0	1	0	4	0	0
タイプ 4	(破壊層 3)	0	2	9	0	26	1	6
タイプ 5	0	0	0	0	0	0	0	10
タイプ 6	0	0	0	8	0	15	0	0
タイプ 7	0	0	1	8	0	2	1	0
タイプ 8	0	0	0	1	0	2	0	0
タイプ 9	0	0	0	4	0	1	0	0
タイプ 10	0	0	0	4	0	0	0	0
針	(破壊層 2)	0	3	12	0	31	0	0
小さいリング	(破壊層 44)	0	0	8	0	2	4	2
プレスレット / アンクレット	0	0	0	3	0	5	0	2
スタンプ	(破壊層 2)	0	0	2	0	0	0	0
笏	0	(宮殿跡 1)	0	0	0	0	0	0

キュルテペとボアズキョイのみで確認されている。その他に、鍬、鎌、錐、石突、ピンタイプ1~4とタイプ6~9、針、小さいリング、プレスレット / アンクレットもキュルテペとボアズキョイのみで確認されている遺物である。さらに、ナイフや鋳型は、アリシャール・ホユック、キュルテペ、ボアズキョイの3つの遺跡で確認されており、鋳型においては、キュルテペの工房跡からも出土が確認されている。アリシャール・ホユックのみで出土している特徴的な遺物として、へら、ピンタイプ

10、スタンプが確認されている。

- ③ カールム / ワバルトゥムの墓から出土した青銅製品
墓から出土した青銅製品は、副葬品の意味合いが強いと思われるが、当時実際に使用した後に埋葬されたものかどうかはわかっていない。カールム・カニシュ第II層のカールム区域の墓から出土した青銅製品は、槍先タイプ1a、斧タイプ1、2aおよびタイプ2b、フライパン、ピンタイプ4とカーネリアンが付属している小さいリン

グである。

カールム・カニシュ第Ⅰb層と同時期のカールム／ワバルトゥムの墓から出土した青銅製品は、アリシャル・ホユックでは、短剣タイプ3、錐、ピンタイプ4およびタイプ7、小さいリングが確認されている。また、キュルテペでは、短剣タイプ1b、1cおよびタイプ2、槍先タイプ1a、斧タイプ1、2a、およびタイプ3、鎌、二又の武器、ボウル、バケツ、リール、ピンタイプ4とタイプ5、青銅の小さいリングに金のプレートが施されているもの、銀で覆われたプレスレット／アングレットの出土が確認されている。キュルテペでの出土例からもわかるように、墓に埋葬された青銅製品は、建物跡から出土した青銅製品よりもデザイン性に富んでおり、加工なども施されていることから、カールム・カニシュ第Ⅰb層での金属製品全体の加工技術の向上もみられたのではないかと考えられる。

2) カールム・カニシュ第Ⅱ層と第Ⅰb層から出土した青銅製品の比較

今回の資料の中で比較できるのは、キュルテペのカールム区域の建物跡と墓のみとなっている。カールム・カニシュ第Ⅱ層と第Ⅰb層の時期のカールム区域の建物跡から出土した遺物を比べると、第Ⅱ層で出土が確認された鎌、二又の武器、および鎌は、第Ⅰb層では未だ出土が確認されておらず、比較対象にならなかった。また、斧タイプ2b、ナイフおよび鑿は、第Ⅰb層のみで出土が確認されている。さらに鑄型については、第Ⅱ層の時期の方が多数出土していることがわかるが、同様のタイプが継続して使用されていたかどうかについて言及するまでには至らなかった。

そして、カールム区域の墓から出土した遺物を比べると、第Ⅱ層では、短剣の出土が確認されていないが、第Ⅰb層になると、短剣タイプ1b、1cおよびタイプ2の出土が確認されている。また槍先は、タイプ1aのみが第Ⅱ層から第Ⅰb層にかけて、継続して出土していることがわかった。斧タイプ1とタイプ2aは、第Ⅱ層と第Ⅰb層の両方の層から出土が確認されたが、タイプ2bは第Ⅱ層のみ、タイプ3は第Ⅰb層のみで出土が確認されている。ピンについては、タイプ4が第Ⅱ層で確認され、このタイプは継続して第Ⅰb層でも確認されている。また、小さいリングも同様に2つの層から出土が確認されている。そして、第Ⅰb層からのみ出土が確認されているものとして、鎌、二又の武器、ボウル、バケツ、リール、ピンタイプ5およびプレスレット／アングレットがある。

このように、カールム・カニシュ第Ⅱ層から第Ⅰb層にかけて、一部の青銅製品で同様の形態が継続して使用さ

れていたことがわかった。また、第Ⅰb層の時期には、青銅製品の種類が増加していることもわかり、青銅製品の使用が増えたことが確認できた。ただし、第Ⅱ層の出土例が少ないことから、どの程度種類が増えたのかなどの、正確な数値を把握するまでには至らなかった。

5. おわりに

本稿では、中央アナトリアから出土した青銅製品を出土地点によって分類することで、青銅製品の当時の使用状況の一部を明らかにした。カールム・カニシュ第Ⅱ層と第Ⅰb層では、第Ⅰb層の時期で、青銅製品の種類や量が増加していることが明らかになった。

今後の課題として、時期の明確な層序から出土した青銅製品の資料数を増加させ、青銅製品の形態の変遷やメソポタミアやレバント地域との比較を試みたい。また、本稿では、対象となる遺物の化学分析の結果を反映するまでには至らなかったため、化学分析の結果と型式論に基づいての分類が、どのように関連するのか考察することも課題としていきたいと考えている。

謝辞

本稿は2014年に英国ダラム大学大学院に提出した修士論文の一部を大幅に加筆、修正したものである。指導教員であるグラハム・フィリップ教授 (Prof. Graham Philip)、ロビン・スケーツ博士 (Dr. Robin Skeates) のお二人からは、執筆の指導を賜りました。そして、アナトリア考古学研究所所長の太村幸弘博士からは、資料の使用許可をいただきました。また、本稿を執筆するにあたり、小口裕通教授、小口和美教授、査読にあたってくださった方々にも大変貴重なご指摘、ご教示をいただきました。ここに記して、感謝を申し上げます。

註

- 1) 「アッシリア・コロニー時代」は、カールム・カニシュの第Ⅱ層 (前1950年頃～前1836年頃) および第Ⅰb層 (前1833年頃～前1719年頃) の2時期に分けられる (Kulakoğlu 2011: 1019)。「アッシリア・コロニー時代」 (前1950年頃～前1719年頃) とは、別の時期区分で言えば、「中期青銅器時代」のほぼ前半にあたる。アナトリアの「中期青銅器時代」は、おおよそ前2000年頃～前1500年頃と考えられており、「ヒッタイト古王国時代」 (前1700年頃～前1500年頃) も含まれる。
- 2) ここでいう「青銅」とは、発掘された際に緑青を帯びていた、銅もしくは銅合金のことである。
- 3) 近年、中央アナトリアのカイセリ近郊のヒサルジュク (Hisarcık) では、前3千年紀の錫の鋳床が確認されている (Yener et al. 2015)。この鋳床が前2千年紀まで継続して使用されていたかどうかについては、未だ明らかになっていない。
- 4) キュルテペ出土の文書内において、青銅や青銅製品に関する記述は確認されていない (Veenhof and Eidem 2008: 86)。しかし、交易に関する記述の中で、銅と錫の交易レートが明らかになっており、錫の値段が銅の14倍で取引されていることがわかっている (Barjamovic 2011: 14, Table 1)。このことから、当時、青

銅製品の鑄造に欠かせない錫の取引が重要視されていたことがいえる。また、青銅製品の鑄造に関して、キュルテペ出土の文書によると、冶金職人についての記述が確認されている。そこには、主にアナトリアの人名が記載されており、アッシリアの人名はわずかしかなかった (Dercksen 1996: 71)。彼らは主に金属の精錬、鑄造、鍛造などの工程を行い、アッシリア商人から原料を調達していた。そして、金属加工や売買に関しては、キュルテペでは宮殿で管理されていたこともわかっている (Dercksen 1996: 72; Dercksen 2004: 30)。それらを証明する工房跡がキュルテペから出土しており、カールム・カニシュ第Ⅱ層から3つ、第Ⅰb層からは少なくとも6つの工房跡が確認されている (Özgüç 1986: 41-44, 48-50)。カールム・カニシュ第Ⅰb層の遺構から、工房と居住空間が隣接していたことがわかり (Kulakoğlu 2011: 1021)、そこから鑄型の出土も確認されている (Dercksen 1996: 71-72)。鑄型の中で最も種類が多いのは、短剣や斧の石製の鑄型である (Yıldırım 2010: 116-117)。

- 5) ボアズキョイの発掘報告書 (Boehmer 1972) や H. クライン (Klein) のピンの分類 (Klein 1992) では、針もピンのうちに含まれているが、本稿では、ピンと針を分けて考えている。ピンと針は、同様に細長い胴部と尖った先端 (針先) を持つが、頭部に穴が空いているものを針とし、球形などの形をしたものが付属しているものをピンと定義している。
- 6) アリシャル・ホックのテラス第10層から出土した文書から、この層は、カールム・カニシュ第Ⅰb層と同時期であることがわかっており (Moorey 1999: 176)、このことから、出土した遺物も、カールム・カニシュ第Ⅰb層と同時期であると考えられる。
- 7) ボアズキョイの下の町 (Unterstadt) から出土した遺物は、建築遺構や土器の形態からカールム・カニシュ第Ⅱ層と同時期のものであると考えられていたが、近年、出土した文書からカールム・カニシュ第Ⅰb層と同時期であることが指摘されている (Gunter 1980: 237-241)。
- 8) カマン・カレホックの主丘第Ⅲc層の北区XⅡ区、Room 148 および Room 150 から出土した遺物は、印影や土器の形態からカールム・カニシュ第Ⅰb層と同時期のものであると考えられている (大村 1995: 10)。

参考文献

- Barjamovic, G. 2011 *A Historical Geography of Anatolia in the Old Assyrian Colony Period*. The Carsten Niebuhr Institute of Ancient Near Eastern Studies. Copenhagen, Museum Tusulanum Press.
- Boehmer, R. M. 1972 *Die Kleinfunde von Boğazköy aus den Grabungskampagnen 1931-1939 und 1952-1969*. Boğazköy-Hattuša 7, Wissenschaftliche Veröffentlichung der Deutschen Orient-Gesellschaft 87. Berlin, Gebr. Mann Verlag.
- Dercksen, J. G. 1996 *The Old Assyrian Copper Trade in Anatolia*. Istanbul, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut.
- Dercksen, J. G. 2004 *Old Assyrian Institutions*, MOS Studies 4. Leiden, Nederlands Instituut voor het Nabije Oosten.
- Deshayes, J. 1960 *Les outils de bronze, de l'Indus au Danube (IVe au IIe millénaire)*, 2 vols. Paris, Librairie orientaliste Geuthner.
- Gernez, G. 2007 *L'armement en métal au Proche et Moyen-Orient Des origines à 1750 av. J.-C.*, I-III Vols. PhD thesis. Université de Paris 1 Panthéon-Sorbonne.
- Gunter, A. C. 1980 *The Old Assyrian Colony Period Settlement at Boğazköy-Hattuša, in Central Turkey: A Chronological Reassessment of the Archaeological Remains*. Michigan, University Microfilms International.
- Klein, H. 1992 *Untersuchung zur Typologie bronzzeitlicher Nadeln in Mesopotamien und Syrien*. Saarbrücken, Saarbrücker Druckerei und Verlag.
- Kulakoğlu, F. 2011 *Kültepe-Kaneš: A Second Millennium B.C.E. Trading Center on the Central Plateau*. In S. Steadman and G. McMahon (eds.), *Ancient Anatolia, 1012-1030*. Oxford, Oxford University Press.
- Larsen, M. T. 1976 *The Old Assyrian City-State and Its Colonies*. Copenhagen Studies in Assyriology, Mesopotamia 4. Copenhagen, Akademik Forlag.
- Lehner, J. W. 2014 *Metal Technology, Organization, and the Evolution of Long-Distance Trade at Kültepe*. In L. Atici, G. Barjamovic, A. Fairbairn and F. Kulakoğlu (eds.), *Current Research at Kültepe-Kaneš: An Interdisciplinary and Integrative Approach to Trade Networks, Internationalism, and Identity*, 135-155. Atlanta, Lockwood Press.
- Moorey, P. R. S. 1999 *Ancient Mesopotamian Materials and Industries: The Archaeological Evidence*. Indiana, Eisenbrauns.
- Özgüç, T. 1959 *Kültepe-Kaniş: New Researches at the Center of the Assyrian Trade Colonies*. Türk Tarih Kurumu Yayınlarından V dizi, Sa. 19. Ankara, Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Özgüç, T. 1986 *Kültepe-Kaniş II: New Researches at the Trading Center of the Ancient Near East*. Ankara, Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Özgüç, T. 1999 *Kültepe-Kaniş/Neša sarayları ve mabetleri= The palaces and temples of Kültepe-Kaniş/Neša*. Ankara, Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- Philip, G. 1989 *Metal Weapons of the Early and Middle Bronze Ages in Syria-Palestine*. Parts i-ii, BAR International Series 526 (i-ii). Oxford, BAR.
- Philip, G. 2006 *Tell el-Dab'a XV: metalwork and metalworking evidence of the late Middle Kingdom and the second intermediate period*. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Postgate, J. N. 1992 *Early Mesopotamia Society and Economy at the Dawn of History*. London and New York, Routledge.
- Schmidt, E. F. 1932 *The Alishar Hüyük Season of 1928 and 1929*. Part I. Chicago, The University of Chicago Press.
- Tsuneki, M. 2014 *Metalwork from Central Anatolia in the Assyrian Colony Period: A Review in the Light of Finds from the Level IIIc Destruction at Kaman-Kalehöyük*. Masters thesis. Durham University [Online]. <http://etheses.dur.ac.uk/10801/> (accessed on 2. November 2015).
- Veenhof, K. R. 1995 *Kaneš: an Assyrian Colony in Anatolia*. In J. Sasson (ed.), *Civilizations of the Ancient Near East*, Vol. II, 859-871. New York, Scribner.
- Veenhof, K. R. and J. Eidem 2008 *Mesopotamia: The Old Assyrian Period*. Göttingen, Vandenhoeck and Ruprecht.
- Wilkinson, T. C. 2014 *Tying the Threads of Eurasia: Trans-regional Routes and Material Flows in Transcaucasia, eastern Anatolia and western Central Asia, c. 3000-1500BC*. Leiden, Sidestone Press.
- Yener, K. A., E. Geçkinli and H. Özbal 1996 *A Brief Survey of Anatolian Metallurgy prior to 500 BC*. In Ş. Demirci, A. M. Özer and G. D. Summers (eds.), *Archaeometry 1994: Proceedings of the 29th International Symposium on Archaeometry*, 375-91. Ankara, Tübitak.
- Yener, K. A., F. Kulakoğlu, E. Yazgan, R. Kontani, Y. S. Hayakawa, J. W. Lehner, G. Dardeniz, G. Öztürk, M. Johnson, E. Kaptan and A. Hacıoğlu 2015 *New Tin Mines and Production Sites near Kültepe in Turkey: A Third-millennium BC Highland Production Model*. *Antiquity* 89/345: 596-612.

Yıldırım, T. 2010 Weapons of Kültepe. In F. Kulakoğlu and S. Kangal (eds.), *Anatolia's Prologue, Kültepe Kanesh Karum, Assyrians in Istanbul*, 116-122. Kayseri, Kayseri Metropolitan Municipality.
大村幸弘 1995 「第9次カマン・カレホユック発掘調査 (1994年)」

『アナトリア考古学研究』4号 1-48頁 中近東文化センター。
大村幸弘 1999 「カマン・カレホユック発掘調査」『中近東文化センターの海外発掘調査』4-33頁 中近東文化センター。

常木 麻衣
国士舘大学大学院グローバルアジア研究科博士課程
Mai TSUNEKI
Department of Globalising Asia,
Kokushikan University